

陳寿は倭人伝の距離が誇大であることを知っていた

2020・10・26

星野盛久

魏志倭人伝には帯方郡から邪馬台国へ至る行程をこう記してある。ちなみに当時の一里は四百三十五メートルであるとされる。以下の里もその長さで計算してある。

郡より倭に至は、海岸に沿って水行し、韓国を歴て、乍南乍東、その北岸狗邪韓国に至る。七千余里。始めて一海を渡る千余里、対馬国に到る。(中略)また南一海を渡る千余里。名づけて瀚海という。一支国に至る。(中略)また一海を渡る千余里。末盧国に至る。(中略)東南陸行五百里にして、伊都国に至る。東南奴国に至る百里。(中略)東行不弥国に至る百里。(中略)南投馬国に至る水行二十日。南邪馬台国に至る、女王の都する所、水行十日陸行一月。

この記事の中で方向が記されている部分だけ取り出すと次のようになる。

1. 韓国を経て乍南乍東、その北岸狗邪韓国に至る。七千余里。

帯方郡から狗邪韓国へは乍南乍東とあり、南へ行ったり東へ行ったりとおおよそ東南に進んだように記してあるが正確に南に何里、東に何里行くのかは分からない。もし、ほぼ東南に七千里進んだとすれば、その場合東と南へ約五千里ずつ行く計算になる。

2. また南一海を渡る千余里。

これは明らかに南へ千里行つたと記されている。

3. 東南陸行五百里にして伊都国に至る。

これも東南に五百里行けば東と南方向へはそれぞれ三百五十里ほど行く計算になる。

東南奴国に至る百里

これも東南に百里行けば東と南方向へはそれぞれ七十里ほど行く計算になる。

南邪馬台国に至る

これは明らかに南へと書いてあるが、何里行つたかはわからない。さらに南であるということ

である。

また狗邪韓国から対馬国へ渡った渡海千里は方向が書かれていないが、次の壱岐へ渡る渡海に「また」あることからやはり南へ向かったと取れる。

以上の記事に記された帯方郡から邪馬台国へ行く行程では東方向に行った距離は合計で五千四百二十里、南方向へ行った距離は合計で七千四百二十里ほどになる。(行程を伊都国起点に放射状に読む説に従うなら伊都国以降の四百二十里は計算に入れず五千里、七千里ということになる)

次の記事である。

郡より女王国に至る万二千余里。

この記事は帯方郡から邪馬台国（女王国）までは万二千里だとしているだけで方向は記していない。しかし最初に取り上げた行程記事の中の距離を全て足すとほぼ万二千里近くなるので行程記事を確認した内容であるといえる。問題は次の記事である。

其の道理を計るにまさに会稽東冶の東にあるべし。

「会稽東冶」には二つの候補地があって一つは現在会稽山がある浙江省紹興付近、もう一か所は福建省の福州付近である。紹興は北緯 30 度付近にあり、福州は北緯 26 度付近にある。会稽東冶をどちらと考えても陳寿が「会稽東冶の東にあるべし」と記したということは、邪馬台国は北緯 30 度から 26 度の範囲の中国の東の海上にあると認識していたことを示している。ここに大きな矛盾があることに気付いた。帯方郡があったと考えてよい韓半島中部からは北緯 26 度の緯線までは南へ約千三百里、北緯 30 度の緯線までは南へ二千里しかない。

先に検討した行程記事では邪馬台国は帯方郡から南へ七千里以上行ったところと記されているのに、「会稽東冶の東にあるべし」とすれば帯方郡から帯方郡から南へ二千里かそれ以下の距離しか行かないところと記されているのだ。

この二つの文章は邪馬台国がどこにあったのかを三国志の著者陳寿自身がどう認識していたかを表す文章であることに疑いはない。そして会稽東冶がどちらであったとしても陳寿が首都洛陽からの距離を大きく間違えるとは考えられない。したがってこの二つの文章には決定的な矛盾がある。しかもその矛盾のある文章を同じ倭人伝の中に陳寿は記している。このような矛盾に陳寿自身が気付かなかつたなどとは思えない。陳寿はこの二つの記事に矛盾があることを承知で倭人伝を記述した。また驚くことにのちの学者もこの矛盾を指摘した形跡がない。

では、三国志に記述された「里」はそんなにでたらめなものなのであろうか。著者はそれを確かめるため三国志の中に出てくる「里」を全て調べてみた。三国志の中の里の使用例は下表のとおりである。

三国志の中で使用されている「里」二百四十七か所のうち、実際に距離を示している里は百十五か所で、そのほかは固有名詞や常套句、あるいは村里という意味に用いられているものである。

距離を示している「里」の内、実際の地図に当たってその距離が妥当と思われるものが四十八か所、どこからどこまでを言っているのかわからないなどの理由で検証できないが、その距離は常識的なもので誇大とは思われないものが四十七か所あることが分かった。一か所だけ検証してみても過小だと思われるところもあった。距離が非常識かと思われるが検証はできないものが十一か所あった。そして、地図に当たって検証でき、明らかに誇大になっている箇所が八か所あった。この距離が誇大になっているもの八か所はなんと東夷伝の中の倭人伝に七か所、韓伝の中に一か所あるのである。倭人伝の中の七か所は先に示した行程記事の中の「里」と、「倭地を参問するに周旋五千里」とある記事の「里」である。韓伝の一か所は韓地を「方四千里」と言っている箇所である。ちなみに東夷伝の中でも倭人伝、韓伝以外に出てくる「里」は誇大なものはない。

このことから三国志の中の距離を表す「里」はほとんど妥当な距離を示しており、誇大になっているものは倭人伝と韓伝に出てくる「里」だけだということが分かる。

三国志の中の「里」についての分析			
評価		個数	
距離 を示 す里	検証不可・常識内	47	
	検証不可・非常識	11	
	検証妥当	48	
	検証過大	8	韓伝・倭人伝だけ
	検証過小	1	
その 他の 里	固有名詞	22	
	郷里	32	
	常套句	50	
	村里	10	
	道のり	3	
	検証不能	7	
	その他	8	
	合計	247	

ではこの八か所の「里」はどれくらい誇大にされているのだろうか。そこで倭人伝の中で出発地と、到着地が比較的異論がなく地図の上で実際の距離が測れる三か所の距離と、倭人伝に記載された距離を比較してみる。測りやすいのは帯方郡から狗邪韓国まで七千里とされる距離、狗邪韓国から対馬まで千里とされる距離、対馬から老岐まで千里とされる距離である。帯方郡は諸説あるが韓半島の中部であったとすることに異論はないだろう。狗邪韓国も韓半島から対馬へ漕ぎ出す港

なのだから韓半島の南部であることに異論はないはずだ。対馬、壱岐はそれぞれ島なので位置ははっきりしている。そこでこの三か所を地図の上で測ってみると、帯方郡をソウル付近としたとき狗邪韓国があったとみられるキメまで約七百里、キメから対馬までは約百里前後、対馬から壱岐までも約百里前後であることが分かる。このことから倭人伝の里数は実際の里数を十倍した数値になっている可能性が高いと考えられる。

このことが示す答えはただ一つである。すなわち陳寿は韓伝と倭人伝の距離は十倍になっていることを知っていたということだ。邪馬台国は会稽東冶の東の海上にあると知っていて、帯方郡から邪馬台国までの距離を万二千里と記述した陳寿は、万二千里は誇大であり、実際は千二百里だと知っていたのである。ではそれを知っていながらなぜ陳寿はあえて万二千里と書いたのだろうか。それは万二千里という距離は陳寿には誇大だと分かっているにもかかわらず訂正できないくらい重要な数値だったということである。陳寿が仕えていた晋の事実上の創始者である司馬懿仲達の残した記録で魏の正式な記録に残された数値だったからだと考えられる。

司馬懿仲達が二百三十八年に東北地方の公孫淵氏を滅ぼし、その地を魏の領土に組み入れることに成功した翌年、邪馬台国の卑弥呼の使いが魏の首都洛陽まで赴いているのは有名な事績である。この邪馬台国使が洛陽からどれだけ遠くから来たのかを記した公文書が魏には残されたはずだ。なぜなら当時遠方の国から使者が来ることは国王の徳の高さを示すことであり、国王は何より喜んだのである。従って遠方の地を征服した將軍たちは征服した地の中で最も遠方の国の使いを仕立てて首都まで連れて行ったのである。これは使いを派遣した遠方の国の都合ではない。あくまで魏の將軍が自分の手柄をアピールするためにしたことである。邪馬台国の使いが魏の都洛陽に赴いた時も魏の皇帝は大いに喜び、司馬懿仲達を幼子の後見役に任命している。そしてこの後見役就任こそが、その後、司馬仲達がクーデターを起こして魏の実権を握るきっかけであり、ひいては晋という国が誕生する礎であったのである。

ではなぜ邪馬台国の使いがそれほど魏の皇帝を喜ばせたのであろうか。それは司馬懿仲達が帯方郡から邪馬台国までの距離、千二百里を十倍にして万二千里と報告したため、邪馬台国は洛陽から万七千里彼方の国とされたためである。ちょうど十年前に司馬仲達のライバルだった曹爽の父親が西方の大月氏国の使いを万六千里彼方から連れてきたことがあったのである。邪馬台国はその大月氏国よりさらに遠い国だと司馬懿仲達は触れ回ったのである。その記録は当然魏の公式文書に残され、後に陳寿が倭人伝を書く資料になった。すでに司馬懿仲達はこの世になく時代は孫の時代になっていたので帯方郡から邪馬台国までの距離は実際には千二百里ほどだということは知られていたと考えられるが、現皇帝の祖父で、事実上の初代皇帝の事跡であった「万二千里」は陳寿にしても訂正できなかったのである。そこで最初に掲げた二つの矛盾する文章が倭人伝に残ったのである。もしかすると陳寿は邪馬台国が会稽東冶の東だと記すことで、行程記事は誇大であることを暗に示そうとしたのかもしれない。